

Title	ロシア語における「主語」と「主題」そして「主体」について：(3)受動構文
Author(s)	林田, 理恵
Citation	大阪外国語大学論集. 22 p.15-p.53
Issue Date	2000-03-31
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79816
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ロシア語における「主語」と「主題」そして 「主体」について—— (3) 受動構文

林 田 理 恵

《ПОДЛЕЖАЩЕЕ》, 《ТЕМА》, 《СУБЪЕКТ》 В РУССКОМ ЯЗЫКЕ

Риэ ХАЯИДА

При традиционном формально-грамматическом подходе активные и пассивные конструкции трактуются как параллельные конструкции, отражающие одни и те же отношения действительности. В таком представлении активные конструкции рассматриваются как исходно-субъектные (центробежные), а пассивные — как исходно-объектные (центростремительные).

Однако такое понимание данного вопроса не дает определенного ответа о возникновении и сосуществовании этих параллельных конструкций в языке.

В исследовании автор пытается определить: 1) структурные и функциональные основы причастий и возвратных форм глагола, считающихся способными участвовать в выражении страдательного значения, в процессе историко-типологической перестройки структуры языка, 2) разноуровневые (морфологические, синтаксические и семантические — в том числе и в связи с грамматической семантикой как аспектуальностью) признаки, характеризующие место и функцию пассивных конструкций в системе современного русского языка, 3) основные когнитивные процессы человека, представленные в пассивных конструкциях, которые позволяют увидеть универсальность залоговых отношений в разных языках. При этом автор основывается на том понимании, что пассивные конструкции имеют особое назначение в языках и по своему содержанию не тождественны активным.

На основе вышеуказанного исследования в настоящей работе рассматривается вопрос о соотношении между понятиями «подлежащее» и «тема» в пассивных конструкциях русского языка.

0. はじめに

人間がある事柄を文として表現し伝達しようとする際、話し手はまず外部世界の中から有意義な断片としてひとまとまりの内容をとり出し、概念化するわけであるが、その概念化の過程には、基本的に二つの異なるタイプを見出すことができるということを、すでに林田 (1996) においてみてきた [11:76-81]. それは概略、以下のようにまとめることができる。

まず第一のタイプは、話し手が、外部世界に属する個体 —— 具体的、抽象的事物 —— を対象としてとり上げ、それに関する性格づけや分類などを自らの経験の中から導き出して、知的判断を下すという概念化である。そのような概念化がなされるとき、文としての表現形式は、主題—論述構造という二項性をもつ文として具現し、話し手によって選び出された —— 特定の共起場面がある場合には、その場面に依存して「主題」の決定がおこなわれ、また特定の先行文脈がない下では、話し手の共感度による概念間の優先的序列構造によって、「主題」が選び出されるのであるが —— 個体が「主題」として文頭に位置するのが常である。

第二のタイプは、外部世界のある限定された時空間に、客観的に生起する事象として、行為 —— ここでの行為とはいわゆる自動詞的なものも含めて、広い意味でとらえたものである —— や一時的状態を伝達する際の概念化である。このような概念化を反映した文においては、その事象の根源的な要因としての動作主が、文の中心軸として把握され、事象を引き起こす契機として、統語的中心要素としての「主語」となり、有標の概念構造がかぶせられない限り文頭位置におかれる。そのことの背景には、人間中心にできている言語において、動作主とは典型的には人間であり、その人間中心的な要素が軸となって展開される事象が伝達される際には、事象の根源たる動作主と、その動作主によって引き起こされる事象、という図像的な語順形式が最も自然であるという事情があると言える。

さらに、以上のような観点を踏まえて、ロシア語において、文法的カテゴリーとしての「主語」は、歴史的、発生的にみて、そこに本来的な意味での、事象の根源的要因としての動作主表示と、判断の中心、発話の出発点としての「主題」の機能の二つをみることができ、その二つの機能が収斂したものとして、「主語」を理解し得るのではないかということを提示した。

すなわち、動作主表示としての「主語」は、根源的には、近年、内外で精力的な研究が進む内容類型学における、いわゆる活格構造言語の活格構文における活格に相関する、事象を引き起こす意志をもつ、人間を中心とした動作主を指示する名詞成分をそこに見出すことができ、それは統語的中心要素として、典型的には文の左端位置に置かれているのである。

一方、「主題」表示としての主語は、活格構造言語の不活格構文において、不活格と相関する、「状態（より始原的には性質、特徴を表わすと考えられる）の担い手」を指示する名詞成分を、その発生的側面として見出すことができるのである。

このような 林田 (1996) における枠組みとしての議論を基礎に、本稿では、ロシア語のいわゆる「受動」構文における「主語」、「主題」という問題を考察していきたいが、この「受動」構文における「主語」、「主題」という問題を検討するにあたっては、まず「受動」構文という表現形式の中に、人間のいかなる概念化の過程が反映されているのかをみていく必要がある。本稿では、このような概念化の過程を、ロシア語における「受動」構文の歴史的な形成・変遷過程、及びその継承としての現代ロシア語における「受動」構文の意味と機能の中にたどり、それらを明らかにしていく中で、それらの構文における「主語」、「主題」という問題を結論づけていきたいと考える。

1. 「受動」構文の「主語」、「主題」認定における問題点

一般に、ヴォイスというカテゴリーとして現われる現象は、「同一の言語外事実の表現に際して、統語構造における項の配置の変更によって、複数の表現形式が得られる場合、その統語構造の核となる動詞の形態変化と、項の配置における体系的な相関関係」[1:45][36:79-81][14:141]として、伝統的には文法的（形態・統語的）カテゴリーとして扱われてきている。

したがって、従来、「受動」構文は「能動」構文に対立するものとして、典型的なヴォイス・カテゴリーに関わる表現形式としてとらえられてきている。そこにおいては、項の配置変換は、言語外事実としての動作主という意味役割を担う項が、文法的主語から降格し、対象の意味役割を担う項が、直接補語から主語へ昇格するという、いわゆる言語外事実としての主体－客体関係の、統語構造上における配置変換としてのみ理解される。

しかしながら、このような理解は、「能動」構文との対立関係において、「受動」構文を形式統語的に規定したにすぎないものであり、そもそも、何故項の配置変換がおこなわれるのか、何故動作主が「主語」として表現されず、客体が「主語」として表現されるのか、そして、「受動」構文の「主語」と「能動」構文の「主語」がそれぞれいかなる機能をもつものであるのか、といった点に関しては何も明らかにされない。もし「能動」構文と「受動」構文を、同一の言語外事実の異なる統語構造による表現である、とするのであれば、このような複数の表現形式の存在、というものを動機づけるファクターの解明がなされなければならないだろう。

このような視点から、「受動」構文の主要な機能は、主題化機能—— 客体をテーマづけを担う「主語」として主題化する。—— や、動作主の非焦点化機能にあるとする理解が確立していく[6:217][7:205][31:1985]。ただ、このような理解にもいくつかの問題が生じてくる。

第一に、動作・作用の客体を主題化するという場合、「受動」構文以外にも、左方転移や話題化変形、分裂構文などのいくつかの可能な文法的手段が存在し、また、動作主の非焦点化という場合にも、不定人称構文や非人称構文などもその機能を担うことができ、それらの場合には、対象の意味役割を担う項が直接補語から主語へ昇格するという現象は観察されない。したがって、同一の機能を担うとされるものの中で、何故「受動」構文においてのみ、直接補語の「主語」化という現象が起こるのかという問題が生ずるし、さらには、複数の可能な手段の中から「受動」構文が選択される場合に、これらの機能以外の何らかの選択基準が説明されなければならない。

第二に、ロシア語の「受動」構文においては、「主語」が必ずしも文頭位置にあるとは限らず、英語やフランス語など、「主語」の文頭位置ということが、無標の文の場合にある程度義務化されている言語の場合であっても、「受動」構文において、さらに左方転移や話題化変形によって、「主語」に有標のテーマが前置されるという現象が存在し、したがって、客体の「主語」化＝「主題」化という理解は成立しない。

以上、従来の「受動」構文の理解における問題点をいくつかみてきたが、それらの根底には、「同一の言語外事実の異なる表現」という理解の存在が、より根本的な問題として横たわっているように思える。

従来の説では、「能動」構文における述語動詞の語彙レベルでの意味は、その動詞の体系的な形態変化によって、ヴォイス転換がもたらされた場合においても不変である、という理解がある。主題化や動作主の非焦点化機能が言われる場合においても、二つの構文の差異は、述語で表現される動作・作用が、動作主を中心に描かれるか、対象を中心に描かれるかの違いであり、やはり、述語で表現されている事態は同一であるとの理解が存在するのである。

しかしながら、従来の説が、上に挙げたような問題点を抱えていることを考えると、そもそも「受動」構文において、ヴォイス転換された述語が表現する事態が、元の動詞が描くそれと同一のものであるのか、という疑問が生ずる。すなわち、「能動」と「受動」ということによる表現の対立性は、単なる動作・作用の方向性、主題選択、さらには動作主の非焦点化ということに留まらず、そこには、述語で表現される事態そのものの差異が、実は包含されているのではないかという疑問である。

もしそうであるならば、まず「受動」構文がいかなる事態の概念化を担う表現形式であるのか、ということが解明されなければ、そこにおける「主語」、「主題」の機能というものについても論ずることができない。

ところで、言語のある表現形式の背後に存在する概念化のプロセスを明らかにするためには、まず、それらの表現形式の歴史的な形成・変遷過程をみていく必要があるであろう。それは、言語の表現形式というものが、人間の思惟の発展のプロセスにおける概念枠の拡張を反映したものであり、それが本来いかなる概念枠をもとに形成されたものであるのか、そして、それがどのように拡張し、その拡張の過程で、他の概念枠といかなる交差をみせ、さらには、それらの間でどのような機能分担がなされてきたのか、ということをもみることなしには、その表現形式の今日における統語的・形態的な形式上の制限、意味的な機能における制限というものを、それらの形式が担う概念化の枠組みとの関連で正しく理解することはできないと考えるからである。

以下、ロシア語における「受動」構文の歴史的な形成・変遷過程を概観し、それらをたどる中で、上に述べたような問題についての考察を試みる。

2. ロシア語分詞型「受動」構文の歴史的な形成・変遷過程

現代ロシア語で、ヴォイス・カテゴリーにおける「受動」相表現を担うとされる二形式のうち、まず、動詞形態の *-m-* (現在分詞) 及び *-h- / -t-* (過去分詞) 接辞による「受動」分詞化 (以下分詞型「受動」構文) の形式について、その歴史的な形成・変遷過程をみてみよう。

2-1. *-m-* 形現在分詞

ロシア語の *-m-* 形現在分詞における分詞接尾辞 *-mь* は、本来中間指標を表わす古い代名詞語根であったとされ、そのような起源をもつ印欧語の中動現在分詞が古スラヴ語によって引き継がれ、さらにロシア語において「受動」現在分詞になったとされている [3:155]。

古スラヴ語において広く多用されていたこの形式は、ロシア語では、当初は教会関係文献や年

代記を中心にその使用が観察され、その後も、特に高尚な文体や擬古体でのみ使われ、それはロシア語史を通して、一貫して「スラヴ的要素の伝統を保持したもの」として、純文語的性格をもっている。実用文献や日常語的要素を反映した書簡においては、その使用は稀であり、その多くは長語尾の形で使われ、限定語的機能をもつものである [23:195-196][22:370-371]。

ところで、現代ロシア語においては、-м- 形現在分詞は他動詞不完了体から作られるが、11～15 世紀の文献においては、のちに完了体動詞とみなされる、特に接頭辞付きの動詞群と相関する、以下のような -м- 形分詞の使用が相当数みられる [22:369]。

воспитаемъ, возлюбимъ, изгонимъ, измолимъ, поддержимъ, поругаемъ,
прогонимъ, укротимъ...

これらの -м- 形分詞の存在は、当時、完了体的意義を発展させつつあった、接頭辞付加動詞が、体の分化に関して未だ未完成な共通体的意義を保持していたことを証明する。この点に関して Данков (1981) では次のように述べられている。

« Едва ли случайно глаголы, не определившись по их видовой принадлежности, в частности и те, за которыми потом закрепилось значение совершенного вида, очень продуктивны в смысле образования от них причастных форм на -м-... Создается впечатление, что причастия настоящего времени испытывают подспудное тяготение к не дифференцированным по виду глаголам. Вероятно, эта ситуация обусловлена именно синкретичностью, разноаспектностью видовой семантики таких глаголов. Наличие у них значения несовершенного вида допускает их трансформацию в причастие настоящего времени, а наличие также и значения результативности делает связь форм на -м- с данными глаголами предпочтительной.» [2:20-21]

「 体の帰属に関して確定されていない、特にのちに完了体の意義を定着させる動詞群が、-м- 形分詞の形成においてきわめて生産的であることは偶然ではない。… 現在分詞は、体に関して未分化な動詞へと潜在的にひかれるといった感じがある。おそらくこういった状況は、まさにこのような動詞が体の意味において融合的であり、多義的であるということに基づくものであろう。それらの動詞は、不完了体の意義をもつことで現在分詞への変換が可能となり、また結果性の意味をもつことで、-м- 形との結びつきが選択されるのである。」

さらに、本来的な分詞と平行して、動詞語幹より -м- 接尾辞付加によって作られる、動詞派生形容詞及び名詞においても、完了体動詞との相関が特徴づけられる。特に注目されるのは、現代ロシア語にも多くの形式が保持されている次のような否定辞 не- の付加された形である。

неизлечимы, неисповѣдимъ, неисцѣлимъ, ненарушимъ, необоротимы,
неопалимая, непобѣдимъ, непоколебимъ, неразрушимъ, неугасимы ...

これらの形のうちの多くが、現代ロシア語においてもそうであるように、過去においても не-

を付加しない形では用いられず、また не- の付加によって、「特徴の恒常的不可能性」という意義を獲得し、恒常的属性表現手段として形容詞化していく [22:369][2:21].

-М- 形分詞が -Н- / -Т- 形過去分詞に比べて、ロシア語史全体を通じて、数量的にも文体的にも制限されたものであること、また、現代ロシア語の -М- 形分詞が、本来的な「受動」相表現形式としては生産性を失い、もはや述語機能をほとんどもち得なくなったという事実は、Ломтев (1956) によって正しく指摘されているように、ロシア語の歴史におけるアスペクト・カテゴリーの発達と、そのことによる動詞類の再編分化に深く関係したものであるということが出来る [23:177].

ロシア語のアスペクト関係の対立は、10 世紀の古代ロシアの文章語の発生の時期に、すでにその基盤が形成され始めていたとされるが、現代ロシア語にみられるようなアスペクト・カテゴリーが完成するのは、17 世紀に至ってからである [16:344-354]. それまでの、動詞語彙素全体に対して、完全にはアスペクトの対立が及んでいない、アスペクト・カテゴリーの確立への途上段階においては、-М- 形分詞の多くはアスペクト・カテゴリーが未分化な、過程及び結果達成という二重の意味を表現する、共通体的意義を有する動詞と相関関係をもっていたのである。しかしながら、アスペクト・カテゴリーの発達に伴い、共通体的意義を有する動詞が、過程の意味を有する不完了体動詞と、結果達成の意味を有する完了体動詞へと次第に分化していくにつれ、「受動」現在分詞としての -М- 形分詞自体はその生産性を消失していく。

それは、アスペクト・カテゴリーの確立に伴い、現在形の動詞は明確に過程的な意味を有するようになるという事実が、-М- 形現在分詞そのものの存立と矛盾してくるということの証しである。すなわち、比較的広く使用されていた過去の時代においても、-М- 形現在分詞は、動作・作用をその過程においてとらえるものではなく、動作・作用の結果としての状態を表現する形式であったということが示唆されてくるのである。

そもそも、動作・作用をその展開においてとらえる、ある事物を、活動の展開の中においてとらえるという表現形式は、言うまでもなく動詞によって表現され得るものであり、動詞の現在形が、過程的な意味にのみ特化していくという状況の下で、-М- 形現在分詞が、動作・作用の過程における事物の状態という意味に傾くにつれ、同一の表現内容をもつ、動詞と -М- 形現在分詞という二形式の並存状況が生み出されることになり、当然、完全な時制パラダイムを有する動詞が優勢となり、-М- 形現在分詞は消失の運命をたどることになるのである [23:177,181].

このような過程で、-М- 形分詞の形式を保持し続けたのは、特にその語基である動詞との意味的つながりを失い、状態の意味が事物の恒常的な属性の意味へと転化して、形容詞化のプロセスをたどった любимый, родимый や、すでにみたような неистребимый, непобедимый 等の語群である。

一方、不完了体「受動」構文として、述語的に使われた -М- 形現在分詞も、19 世紀前半までは、文語体のジャンルに限られてはいたものの、その使用が観察されるが、それは「スラヴ語的」な文語体的要素の伝統をひきずった、文章標準語の影響によるものである。そして、19 世紀後半にはこの形式は完全に再帰動詞、または能動構文に取って代わられることになる [32:198-199].

総じて、ロシア語の歴史における -м- 形現在分詞の消滅過程は、この形式がそもそも、動作・作用の結果としての状態の意味を有する表現形式であることの証しであり、歴史、ジャンルを問わずその生産性を保持し続けたのは、その形式の当初からみられる、動詞派生形容詞としての機能においてのみであり、まさに属性表現としての機能でのみ生き続けたと言えるであろう。

2 - 2. -н- / -т- 形過去分詞

2 - 1. でみた -м- 形現在分詞の事情とは対照的に、-н- / -т- 形過去分詞は、ロシア語の全歴史を通じて、最も広く使用される分詞であり、現代ロシア語においても、分詞としては唯一、文体的差異を問わず、述語としてもその広範な使用が認められるのである。

それは、-н- / -т- 形が過去時制と共通の不定詞語幹から作られることによって、ロシア語におけるアスペクト・カテゴリーの発達に伴って、過程の意味を有する動詞と、結果達成の意味を有する動詞への分化が進んだのちも、結果動詞としての完了体動詞と容易に結びつき、動作・作用の結果としての状態、という「受動」分詞の本来の意味機能を鮮やかに表現し続けたからである。そして、動作・作用の過程そのものを不活性化、弱化し、動作主要素とは一切無関係に、動作・作用の結果としての事物の状態のみを表現する唯一の専用形式として、-н- / -т- 形過去分詞は、ロシア語の組織において古代から現在に至るまで、分詞として最も生産的な生きた要素として存在するのである。

ところで、すでにみたロシア語におけるアスペクト・カテゴリーの発達の過程と関連して、少なくとも 17 世紀までは、完了体と並んで、のちに不完了体に分類される動詞群に相關する -н- / -т- 形分詞の使用が少数ながらも、主として日常語の特徴を反映した文献に観察される [22:383]。これらの分詞も、完了体動詞に相關する -м- 形分詞と同じく、16 世紀までの使用は、当時の未完成的なアスペクト的相關性の影響によるもので、主に無接頭辞動詞から形成される брат(ь), везен(ь), влечен(ь), дран(ь), зван(ь), кладен(ь), кован(ь), метен(ь), чтен(ь) 等の分詞は、動作・作用の過程ではなく、動作・作用の結果としての状態を表現していたとされる [27:315]。これらの分詞は、その後のアスペクト・カテゴリーの確立に伴って生産性を失い、動作・作用の結果としての状態の意味は、もっぱら結果動詞としての完了体動詞に相關する -н- / -т- 形分詞によって表現されることとなる。

ただ、17 世紀においては、多回体動詞の多用などに影響され、それまでの時期にはみられなかった молочиван, давиван, писыван, допрашиван, накладыван, отбиран, подаван 等の、多回体動詞や不完了体の接頭辞付加動詞に相關する分詞の使用が一時活発化するが、そこにおいては、状態の長期継続性及び反復性を表現するという、それまでにはみられない機能が付加されている [22:384]。

このような不完了体動詞に相關する -н- / -т- 形分詞の使用も、18 世紀以降は次第に、主として能動他動詞やまた再帰動詞にとって代わられ、19 世紀末には、不完了体動詞に相關する -н- / -т- 形分詞の短語尾述語使用はほとんど消失し、現代ロシア語においては、битый, шитый, крытый, варенный, меченый 等が、長語尾で限定機能としてのみ残っている。これらの語も、完了体動

詞に相関する -н- / -т- 形分詞と同じく、動作・作用の結果としての状態の意味をその属性表現の内容としてもち、したがってこれらの分詞も、アスペクト・カテゴリー成立以前の形式をひきずったものであると言えるであろう。

ところで、-н- / -т- 形過去分詞に関するロシア語の歴史的変遷過程で興味をひくのは、非他動詞（-ся 形再帰動詞を含む）をその形成語基とするものが存在することである。

Кузьмина, Немченко (1982) によれば、これらの -н- / -т- 形過去分詞は、主に口語の状態を反映する日常語や実用文においてみられ、無人称文の述語として短語尾でのみ使用されており、早くは 13 世紀に以下のような例がみられるとされる [22:381].

- (1) а за жеребець оже не въсѣдано на нь, то грвна кунъ
[Русская правда по списку Новгородской Кормчей 1280 г., 619 об.]

いわゆる無人称受動構文が広く使用される 16 世紀、特に 17 世紀においては、それらの構文において、以下のような非他動詞を形成語基とする -н- / -т- 形過去分詞の存在が認められる。

ѣхано, заѣхано, приѣхано, жито, лажено, испоздано, упоздано,
договорено, договоренось, помиренось, справливанось, стосно ...

一方、周知のように、このような非他動詞に相関する -н- / -т- 形過去分詞は、現代において、方言及び口語にみられる次のようなタイプの文にも広く観察される [33:223-224][24:53].

- (2) У них в город уехано.
彼らは町へ出かけてしまっている。
(3) У них в сарае обедано.
彼らは小屋でもう昼食をすませている。
(4) В баню у кого-то идено.
風呂には誰かが行ってるよ。

これらの非他動詞に相関する -н- / -т- 形過去分詞の存在は、ロシア語のアスペクト・カテゴリーの発達に伴った、過去時制の再編過程と一定の関連をもつように思われる。

古代ロシア語の時制組織において、過去は aorist, imperfect, perfect, pluperfect の四時制よりなる。印欧祖語における原初的なパーフェクトは、先にみた内容類型学において明らかにされたところによれば、活格動詞—不活格動詞の対立における、不活格動詞に相当し、本来、動作・作用ではなく、主体の不活発で非能動的な状態を表わす状態動詞的なものであったとされている [17:212-214][24:46]. この「純粹状態」としての、状態のパーフェクト（*статальный перфект*）は、次第に動詞パラダイムに組み込まれ、「過去の動作・作用の結果達成された状態」としての、動作・作用のパーフェクト（*акциональный перфект*）へと転換し、さらにはアオリスト化することによって、その補完として、動作・作用の結果状態を表現するための新たな分析型パーフェクトが発生してくる。

古スラヴ語では、すでに上記の印欧語の完了幹によるパーフェクト形式は消失しており、分析型パーフェクト(*быти* 動詞の現在形と能動過去分詞である *-л-* 分詞の合成形式)を用いている。この分析型パーフェクトは、アスペクト・カテゴリーの発達に伴ってインパーフェクト、アオリストが消失したのに伴い、連辞動詞を欠落させて、インパーフェクト、アオリストの機能を併せもった、過去形一般の形式へと転換していく。そこではもはや「動作・作用の結果としての状態」というパーフェクトの本来的な機能は失われ、次第にアオリスト的な過去への変質がみられるのである [25:39-40]。

アオリストが動作・作用の出現、生起そのものを一括してとらえ、話し手の現在一発話時点とは関わりのない形で、客観的に過去に次々と展開される出来事を逐次的に描くという意味で、文章語の地の文に特徴的な意義であるのに対し、パーフェクトは口語に特徴的な対話文において機能する。それは、過去の出来事は対話においては、発話時点一話し手の現在と直接的なつながりをもった形で言及されるのが普通であり、それ故に、過去の出来事は、出来事そのものの生起、展開としてではなく、その出来事が現在といかに関連しているか、すなわち、その出来事の結果としての現在における状態が中心として描かれることになるからである。

先にみた、特に口語や方言における、非他動詞をその形成語基とする *-н-* / *-т-* 形過去分詞の存在は、実はこのロシア語のパーフェクトが、過去形一般の形式へと転換し、アオリスト的な過去へ変質したことに伴う、本来的なパーフェクトの意義を補完するものとしての、新しいパーフェクトの一形式であるとみなすことができよう。それらが、過去においても、特に日常語や実用文にみられること、また、現代ロシア語においても、口語や、口語的特徴をその基本とする方言において著しく発達していることをみれば、これら口語表現において、明白なパーフェクト的意義を表現したいという動機が、文章語をその射程の中心におく標準ロシア語よりも強く働いたとしても不思議はない。

この新パーフェクトの形式は、北西ロシア、特にプスコフ、ノヴゴロド地方においては、非他動詞に相関する *-ши* 形述語によって「能動」パーフェクト(動作主の動作・作用の結果としての状態を表現)を、他動詞に相関する *-н-* / *-т-* 形述語によって「受動」パーフェクト(対象の動作・作用の結果としての状態を表現)を表現する [33]。

- (5) Отец *вставши*.

父は起きている。

- (6) Сын *женивши*.

息子は結婚している。

- (7) А севонни у меня печка *затоплена*.

今日は私のところはペチカがつけてある。

- (8) У ей ковер красивой *достан*.

彼女のところ、きれいな絨毯が手に入ったのよ。

カリーニン州、トルジョーク地方、セリゲル湖一帯では、-ши 形述語が上記の「能動」パーフェクトの意味以外に、次のように「受動」パーフェクトの機能も担っており、-н- / -т- 形述語による表現はみられない。

- (9) Контора *заперши*.

事務所はもう閉められている。

- (10) Корова *напоивши*.

雌牛はもう水がやってある。

さらに、オネガ湖の北東地域沿岸から南西部にかけての一带では、非他動詞に相関する -н- / -т- 形述語が広く使われ、ここでは「能動」パーフェクトも「受動」パーフェクトもこの形式によって表現され、-ши 形述語の使用はほとんど観察されない。

- (11) У сына *жсенось*.

息子は結婚している。

- (12) У него *уехано было*.

彼はもう行ってしまっていた。

いずれの場合も、これらの諸方言における新パーフェクトの形式は、-л- 形によって表現されるアオリストの意味とは明確に区別して、パーフェクトの意味として用いられており、パーフェクトとアオリストの構造的な対立が観察されるのである。

ところで、標準ロシア語においては、完了体動詞のパーフェクトの意味は、口語に特徴的な対話文において機能するということはすでにみた。したがって、現代標準ロシア語においては、完了体動詞の過去は、対話文—パーフェクトの意味、地の文—アオリストの意味、という図式が成立しそうであるが、対話文においても、完了体動詞がパーフェクトの意味をもつか、アオリストの意味をもつかは、相当程度その動詞が使用されている文の語彙的、統語的環境に左右されると言える。

特に完了体他動詞能動構文の過去時制においては、最もはっきりとそのパーフェクトの意味が表現されるのは、次のように主語及び直接補語が省略される場合である。

- (13) —*Вспомнил! Вспомнил!* В Пушкине открылась буречная «Ялта»! Все понятно.

Посхал туда, напился и теперь оттуда телеграфирует!

[М. Булгаков. "Мастер и Маргарита"]

「思い出したぞ! 思い出した! つい最近、プーシキンに羊肉専門のレストランが開店し、その店が《ヤルタ》という名前だった! これですっかり読めた! あそこに出かけて行って、飲んだくれて、そこから電報を打ったのだ!」

このような場合には、動作・作用における他動性、エネルギーの流れそのものは中立化され、

動作・作用の結果のみに意味上のアクセントが移動している。主語及び直接補語を備えた非省略文にあっては、動作主及び対象の存在によって、動作・作用の展開そのもの、エネルギーの動作主から対象への流れという観念が、常に聞き手の意識の中に呼び起こされ、したがって、動作・作用そのものではない、「結果としての状態」というパーフェクトの意味は描かれにくくなるということが言える。

一般に、他動詞、非他動詞を問わず、対話文においてパーフェクトの意味がより明示的な形で現われるのは、以下にみるような уже, сейчас, теперь 等の副詞や, вот, ну, даже 等の助詞が、文中で完了体動詞の過去時制と共に使われ、過去の動作・作用の結果が発話時点において問題となっていることが表わされている場合である。また、複文構造において、現在、未来時制の節と共存する場合も、過去の動作・作用の結果と現在の状態の結びつきが明示的に表現され、このような条件下でもパーフェクトの意味が顕現する。

- (14) — Ну, что же, теперь, я надеюсь, вы вспомнили мою фамилию?

["Мастер и Маргарита"]

「さあ、どうです、そろそろわたしの名前を思い出していただけたではありませんか？」

- (15) — Когда же Лиходеев едет в Ялту?

— Да он уж уехал, уехал! — закричал переводчик, — он, знаете ли, уж катит!

Уж он черт знает где!

["Мастер и Маргарита"]

「リホジェーエフはいつヤルタに行くのです?!」

「もうとっくに出発しましたよ!」と通訳は叫んだ。「ほんとうに、もう汽車の中ですよ! いまごろは、どこにいるものやら!」

- (16) — Ну что же, славно, славно! — отозвался Стравинский, — вот все и выяснилось.

Действительно, какой же смысл задерживать в лечебнице человека здорового?

["Мастер и Маргарита"]

「まあ、いいでしょう、結構、結構!」とストラヴィンスキイは答えた。「これで、なにもかもがはっきりしてきました。確かに、健康な人間を病院に引きとめておくことにどういう意味があるでしょう!」

- (17) — Я пытался их вразумить, — соврал он.

— Откуда стало известно? Почему об этом говорят?

[Ю. Трифонов. "Дом на набережной"]

「二人に言ってやろうと思ったんだが」グレボフは嘘をついた。

「どこから知れたのかしら? どうしてそのことが噂になっているのかしら?」

一方, постареть, похудеть, пополнеть, состариться 等の, 主体の不可逆的な質的变化を表わす非他動詞においては, 語義そのものが主体の質的变化だけでなく, それに不可避免的に伴う,

結果としての主体の恒常的属性、状態を表現しているので、対話文のみならず、次の例のような地の文においても、パーフェクトの意味が優勢となる。

- (18) Она постарела, отяжелела, волосы были наполовину седые, но осталась способность мгновенно белеть лицом, ... ["Дом на набережной"]

ソーニャは老けこみ、動作が鈍くなり、髪はなかば白くなっていた。しかし、すぐに顔を蒼白くすることは昔と変らなかった。

- (19) Он ссохся, согнулся, голова ушла в плечи, но на скулах еще теплился неизбытый до конца ганчуковский румянец. ["Дом на набережной"]

彼は干からびて、腰が曲がり、首は肩にめり込んでいた。しかし、頬骨には、まだ消えぬガンチュークらしい赤みがさしていた。

このように、完了体過去時制におけるパーフェクトの意味の顕在化にとっては、対話文での使用ということのみでは、その十分条件とならず、動詞のもつ語彙的意味や他動性、特定の語彙的、統語的文環境の有無といった条件が、パーフェクトの意味の顕在化を大きく左右すると言える。

標準ロシア語は、「過去の動作・作用の結果としての現在の状態」という、本来的なパーフェクトの意味を明示的に表現する専用形式として、他動詞に相関する -н- / -т- 形分詞を述語とする構文を発達させ、非他動詞に関しては、パーフェクトの専用形式を失い、過去形一般の形式にその表現を委ねている。一方、口語や方言では、他動詞、非他動詞ともにパーフェクトの新たな専用形式を生み出し、完了体動詞の -л- 形述語については、アオリスト形式としてのみ機能している。こういった事情には、上記の完了体動詞過去時制におけるパーフェクト的機能の不安定性ということが深く関わっているのである。

Добрев (1982) によれば、「受動」過去分詞を構成する接尾辞 -т-, -н- は、始原的には、ヴォイス・カテゴリーとは無関係に、動詞特徴を指示する指標であり、「受動」過去分詞は本来、活格動詞にこれらの指標を付与した、動詞派生形容詞であったとされる [3:172-173]。ロシア語史においても、これまでみてきたように、非他動詞に相関する -н- / -т- 形分詞の存在、特に 16 - 17 世紀における無人称文における -н- / -т- 形分詞の多用など、これらの分詞が、他動性を基軸とするヴォイス・カテゴリーとは無関係に、主として、「動作・作用の結果達成された状態」という、本来的な意味でのパーフェクト機能を表現する形式として存在してきたことを示唆している。

その後、非他動詞に相関する -н- / -т- 形分詞のうち、再帰動詞から形成される分詞は、19 世紀初頭には消失し、非再帰動詞に相関する例も、18 世紀から 19 世紀の標準ロシア語の規範においては、хожено, пожито, поработано, поплакано 等のごく少数のものに限られている [22:382]。このようにして、-н- / -т- 形分詞は現代ロシア語の規範では、非再帰他動詞とのみ相関するに至り、ヴォイス変換の文法化手段として、「受動」分詞としての地位を確立する基盤を得るのである。

しかしながらすでにみたように、現代ロシア語においても、口語や方言では -н- / -т- 形分詞が「受動」表現とは無縁の、パーフェクト機能を表現する状態指標形式として使用され、そこでは

以下のように、いわゆる「受動無人称形」としての *-но / -то* 形述語が使用され、さらにはそこから、語尾 *-о* の脱落した、不変化語としての *-н / -т* 形述語がより頻度を増して使われるようになりつつある [22:386-390][33:225-226].

- (20) *Замуж-то у ей с весны выйдено.*

彼女は春から結婚している.

- (21) *Изба поставлено.*

百姓家はもう建ててある.

- (22) *Окно выбит.*

窓がたたきわられている.

- (23) *У меня хороша картошка посажен нынче.*

わたしのところじゃ、今年はいいいジャガイモが植えてある.

上記の例において、述語の形はいずれも名詞成分と呼応していない. 特に (21) ~ (23) の北西ロシア地域の方言において、*изба*, *окно*, *картошка* という名詞成分は、主語であるのか直接補語であるのかは不明であり (これらの地域では、*изба*, *картошка* という形で直接補語をも表現する), したがって、これらの文は「能動」, 「受動」の区別に関して未分化であると言える. 総じて、これら口語や方言における *-н / -т* 形分詞は、ますます不変化語として、状態指標表示の形式への傾向を強めていると言え、ロシア語の口語、方言においては、ヴォイス・カテゴリーが確立しているとは言い難い状況にあると言えるだろう.

3. ロシア語再帰型「受動」構文の歴史的形成・変遷過程

現代ロシア語においては、再帰指標である接辞 *-ся* を付加した動詞をその中心項とする、*-ся* 形動詞によって作られる「受動」構文 (以下再帰型「受動」構文) が、不完了体他動詞「能動」構文をヴォイス転換する機能をもつものとして定立されている.

しかしながら、後にみるように、現代ロシア語においても、この再帰型「受動」構文はヴォイス・カテゴリーの表現手段としてはきわめて不安定なもので、文法的受動表現としては未だ完成していないといえることができる.

ロシア語の *-ся* 形動詞の歴史的成立、及びその変遷については、すでに Данков (1981) や Крысько (1997) などによって明らかにされている [2:59-94][19:375-382]. 本稿では、その詳細について触れることはしないが、現代ロシア語における再帰形「受動」構文の不安定性を、その歴史的継承性に求めるという意味で、次に *-ся* 形動詞の意味・機能の変遷を簡単にみてみたい.

周知のように、スラヴ祖語は他の印欧語と同じく、ギリシャ語やラテン語がもっていた中動相を表わす特別な人称語尾という、相対立を表わす形態的手段をすでに失っている.

この能動相と中動相の対立は、内容類型学においては、印欧祖語の古層に存在した、遠心相と

求心相の対立として理解されるものであるが、そこでの遠心相の指標は、動作・作用が主体の外部へと拡大するプロセスをもつということを表わし、一方、求心相の指標は、動作・作用が主体内に閉じられて展開することを表わす [17:139-144,193-199].

そこでの語形対立は、直接補語を主語に転換するというような、ヴォイス的なものとは原理的に異なっており、単に動作・作用が主体内に留まるか、外部へ拡大するかという指標として存在するのである。

スラヴ語及び古代ロシア語においては、この求心相—中動相のもつ機能は、再帰代名詞によって引き継がれ、この再帰代名詞が、次第に動詞に後置する接辞要素（-ся）に変わり、今日、現代ロシア語にみられる再帰動詞（возвратные глаголы）が成立するのである。

したがって、現代ロシア語の再帰動詞における、純粹再帰、相互再帰、一般再帰、間接再帰などの多様な意味は、本来の、「動作・作用が主体内に留まり、他に及ばない」という求心相的な意義からのメタファー的な意味的拡張の結果である（純粹再帰—自己に対する動作・作用、相互再帰—複数の主体間で留まる動作・作用、一般再帰—主体内に留まり、他へ波及しない自律的な動作・作用及び変化）。再帰動詞における「受動」の意味も、このような多様な意味の一つにすぎないのであって、そこにはやはり、まず中動の意義が前提にあり、それが文の具体的な使用の中で、中動の個別的な意味の一つとして、「受動」の意味を獲得するのである。

Данков (1981) によれば、古代ロシア語の文献に現われる -ся 形動詞のうち、「受動」の意味をもつものは全体の 7-9% にすぎず、それらの構文において「受動」の意味を支えているのは、動作主を表わす語彙的要素の存在を始めとする「可変的な語彙的且つ形態・統語的な手段の組み合わせ」であるとしている [2:86-87].

古代ロシア語の、アスペクト・カテゴリーが確立される途上の段階にあつては、「受動」の意味をもつ -ся 形動詞には、後に完了体動詞とみなされる動詞群のものが半数以上みられるが [2:91], すでに 2-1., 2-2. でみたように、アスペクト・カテゴリーの発達に伴い、結果動詞としての完了体動詞においては、-н-/-т- 形分詞がその「受動」的意味を担い、状態表現としての -н-/-т- 形分詞が結びつき得ない、過程性を意味する不完了体動詞においてのみ、-ся 形動詞が、「主体内に留まる動作・作用や変化の過程」を表現するという、中動的意義の拡張によって、「受動」表現を担うこととなる。⁽¹⁾

しかしながら、すでにみたように、-ся 形動詞はまずもって中動的意義をもつものであり、個別の意味は文の具体的な使用の中で発生し、特に「受動」の意味が明確に規定されるのは、「主語」の位置にある事物が完全な脱動作主性を有し、且つ構文内に実際の動作主を指示する項が存在する三項構文においてである。このような構文的特性によって、再帰型「受動」構文は、不完了体動詞の全体系に相関する、受動カテゴリーを表現する文法的手段とはなり得ないという事態もたらされるのである。

それは、歴史的にみても、-ся 形動詞が「受動」の意味を有するのは、そのほとんどが三人称形においてであり、一・二人称を「主語」とする構文はごく少数であるという事実によって裏づけられている [2:93]. というのも、一・二人称代名詞は、言語において事象生起の中心軸——話

し手と聞き手 —— たる要素を表現し、それらが「主語」として示されるときは、そこで描かれている事象を引き起こす契機 —— 動作主として理解するのが最も自然であり、語彙的、統語的環境によってその意味が規定される -ся 形動詞において、一・二人称を「主語」とすることは、「受動」の意味を排除する傾向をもたらすのである。

「主語」の位置にある事物の脱動作主性という条件は、三人称の再帰型「受動」構文においても一定の傾向を生み出す。すなわち、脱動作主性という「主語」の特徴が、具体的な特定事物ではなく、不定の、一般化された事物へと「主語」をひきつけるということによって、再帰型「受動」構文は、特定事物を前提とする、具体的に展開される過程表現ではなく、多くの場合、不定の事物を前提とする習慣的事実、恒常的事実の表現へと、その意味的機能を傾けるのである。

さらに、-ся 形動詞が本来的に再帰化の語形成手段によって生成されているという事実は、そもそも -ся 形動詞の形そのものをもたない他動詞や、あるいは -ся 形動詞の形はあっても、それが「受動」の意味をもたないような他動詞がかなりの数に上るという事情をもたらす。Крысько (1997) によれば、12～13 世紀の古代ロシア語における大多数の他動詞は、「受動」の意味の -ся 形動詞をもたないとされる [19:375]。

このように、-ся 形動詞の歴史的な生成、及びその意味と機能における発展過程そのものが、ヴォイス・カテゴリーの文法的表現手段としての再帰型「受動」構文の不安定性を生み出しているものであり、-ся 形動詞と「受動」性表現との不安定な相関性は、後にみる現代ロシア語における再帰型「受動」構文の特徴にも継承されていくのである。

4. 現代ロシア語における「受動」構文の意味と機能

4-1. 分詞型「受動」構文

現代ロシア語の「受動」構文の意味と機能、その諸特徴については、すでに 林田 (1999) で詳しく検討したが、まず、分詞型「受動」構文については以下のようにまとめることができよう [12]。

- (24) (i) 「受動」化を許容する動詞は大多数のものが結果(効力発生を含む)動詞である。
- (ii) 分詞型「受動」構文の基本的な意味は、「動作・作用の結果としての対象の変化した状態の継続」として理解されるべきものである。ただし、現在以外の時制においては、一定の統語的環境において、「動作・作用の結果としての対象の変化した状態の出現」の意味が表現される。
- (iii) 非情名詞を「主語」とする文が最も典型的である。
- (iv) 造格による動作主表示は必須ではなく、むしろ稀であり、動作主表示をもたない二項「受動」構文が頻度としては圧倒的に高くなる。
- (v) 「主語」が文頭位置にではなく文末に置かれる、動作・作用の客体の主題化という機能をもたない構文が数多く存在する。

(i) については、従来、対象の位置移動を表わす動詞 (отвезти, привести, отослать, прислать ...), 授受動詞 (дать, продать, взять, купить ...), 社会的地位等の変化を表わす動詞 (назначить, перевести, уволить, выслать ...), 開始, 終了を表わす位相動詞 (начать, прекратить ...), 言語, 思考, 認識活動を表わす動詞 (сказать, произнести, решить, забыть, понять, заметить ...) などは、動作・作用のみを意味する「動作動詞」として分類され、このような動詞からも分詞型「受動」構文が作られるとされてきた。

しかしながら、これらの動詞のうち最初の二つのグループは、位置変化, 所有権の移動などの明確な対象変化を表わしており、残りのグループの動詞も、確かに対象に対する本質的な変化はもたらさないものの、日本語で持続相を表わす「テイル」や結果相を表わす「テアル」などをつけると、「任命している」「終わっている」「言っている」「決めている」等、過去の出来事, 状況が発話時や基準時点において何らかの影響, 効力をもたらす効力持続の意味をもち得る動詞であり、動作の完了の時点においても、対象における何らかの効力の発生 ― 抽象的な立場, 状態の変化が含意されると考えられる [12:121-123]。

一方、動作の完了の時点で対象に対する何の変化ももたらさず、またその後の事態に対して何の効力も原則として及ぼさない、本来的な意味での動作動詞 (миновать, перейти 等の移動を表わす動詞, побить, ударить, поцеловать 等の打撃, 接触の動詞, застать, подождать 等の関係を表わす動詞) は、完了体他動詞であっても、対応の分詞型「受動」構文をもたないのである。

(ii) についても、従来は、分詞型「受動」構文は、対応する完了体他動詞の語彙的な意味や文脈によって、「動作・作用の完了の事実」, 「動作・作用の結果としての対象の変化した状態の継続」という二つの意味を表現するとされてきた [15:365][14:163-164][30:200]。

現代ロシア語の -и- / -т- 形分詞は、すでにみたように、原則として完了体の結果動詞に相関する。そして、これらの分詞を述語とした「受動」構文の、特に現在時制においては、以下の例⁽²⁾にみるように、主語としての対象が外在的な動作主から動作・作用を蒙る、という本来的な意味の受動ではなく、「動作・作用の結果としての対象の変化した状態」が、動作主の介在ということとは一切無縁な形で表現され、したがって、そこでは原則として動作主も表示されない、ということ、これまでも異論なく認められてきたことである。

- (25) ..., что Иркутский острог *расположен* на правом равнинном берегу Ангары, *возведен* замечательно, ... [92]

イルクーツクの柵はアンガラ川右岸の平地にあり、たいへん見事に構築されてあって, ... [130]

- (26) Те, кто *похоронен* на Амчитке и умер от голода в Нижнекамчатске, счастливее Сёдзо. [94-95]

アムトカ島に葬られている連中だって、それからニジネカムチャツクで餓死した連中だって、まだ庄よりは倖せだ。 [134]

- (27) В самом деле, здесь *выбиты* японские иероглифы. [139]

なるほどな、日本の字が書いてある。 [217]

しかしながら、過去、未来時制においては、この「結果としての状態」の意味は、一定の語彙的・統語的条件の下で変化し、「動作・作用の結果」ということが話者の認識場から外れ、「動作・作用の完了の事実」のみが表現されるとされ、「状態受動」(*статальный пассив*) としての第一のタイプに対して、「動作受動」(*акциональный пассив*) として理解されてきたのである。

そこにおける一定の語彙的・統語的条件とは、(28) ~ (31) の例におけるように、まず (i) でみた「動作動詞」として分類された動詞に相関する「受動」構文の場合や、文中に動作完了の時点、及び完了に要する期間を表わす時の状況語が存在する場合である。

- (28) Спустя десять лет, в 1642 году, острог *был перенесен* на левый берег реки, на семьдесят километров вверх по течению. [84]

そして、十年後の一六四二年に、柵は上流七十キロのレナ川左岸に移されている。

[117]

- (29) В экспедицию, возглавленную капитаном Витусом Берингом, *был также назначен* крещеный японец Яков Максимов, ... [15]

ビトゥース・ベーリング大尉の指揮する探検隊には、その一員として、同じように洗礼を受けた日本人ヤコフ・マクシモフも任命された。 [14]

- (30) В 1735 году их направили в Академию наук для освоения русского языка — а в 1736 году при Академии наук *была открыта* школа японского языка. [15]

そして一七三五年にロシア語学習のため科学アカデミーに送られ、翌一七三六年には科学アカデミーの中に日本語学校が開設されている。 [15]

- (31) Дорога эта называлась Садовой улицей и *была проложена*, как ему сказали, около десяти лет назад. [167]

この道はサドワヤ通りと呼ばれ、十年ほど前に作られたものだということだった。

[267]

しかし、すでにみたように、そこでの「動作動詞」とは、実際には位置移動や効力発生など、対象に何らかの意味で変化を与えるものであり、本来的な意味での動作動詞ではない。したがって、これらの動詞に相関する「受動」構文を、それ以外の結果動詞に相関する「受動」構文と意味的に区別して、「動作受動」とする必然性は生じ得ないと考えられる。

一方、文中に動作完了の時点、及び完了に要する期間を表わす時の状況語が存在する場合とは、典型的には過去時制の場合である。このような場合には、過去に生じた事態が一括して「点」としてとらえられ、抽象的に報告されるという、アオリスト的な意味が出現する。未来時制の場合

にも、動作・作用の出現、生起を「点」としてとらえ、その可能性を述べるという点で同様に理解され得る。このように、分詞型「受動」構文が現在時制以外でアオリスト的意味を表現する場合に、従来の説では、そこでは「結果としての状態」ではなく、「動作・作用そのものの完了」が描かれる、とされているのである。

ただ、アオリストの本質的な機能が、事態をその内容的展開の側面に一切触れず、非限定なものとして表現することにあることを想起すれば、アオリスト的性格によって事態が「状態」から「動作・作用」へと転換されるわけではなく、そこではやはり状態の出現、存在が、事実として一括してとらえられて表現されていると言ってよいであろう。ただ、事態が一括して「点」としてとらえられるという意味で、このアオリストとしての分詞型「受動」構文においては、「動作・作用の完了」の事実と「状態の出現」の事実は、限りなく接近して融合する可能性を内包している。そこから、本来的なパーフェクトの意味を表現する専用形式としての分詞型「受動」構文が、アオリスト的意味の影響によって変質し、対応する「能動」構文にその論理的意味内容を接近させるという事態が生ずるのである。分詞型「受動」構文は、まさにこの場合にのみ、同一の論理的意味内容としての主体－客体関係の、統語構造上における配置変換、さらには、客体の主題化といった理解へと、一定の道を開いていると言えるであろう。

(iii), (iv) の事実も、ロシア語における分詞型「受動」構文の基本的な意味が、「動作・作用の結果としての対象の変化した状態」として理解されるべきものであることを裏づけている。林田 (1999) で分析対象とした 489 例の分詞型「受動」構文のうち、非情名詞を「主語」とするものは 365 例で、全体の 74.6% を占め、動作主表示のないものは 380 例で、全体の 77.7% に上る。

非情名詞が「主語」として選択され、且つ動作主が表示されない「受動」構文が、基本的に「動作・作用の結果としての事物の変化した状態」を意味するということの背景には、以下のような事情が考えられる。

非情名詞が「受動」構文の「主語」として、事柄の中心にすえられ、その非情の存在に関して認知主体としての人間が言及する場合は、ある働きかけの結果起こる、その非情の存在の目に見える具体的な変化状態を描写するのが自然な表現であり、もし前提となる働きかけが、対象に変化を引き起こすことを含意しないようなものである場合は、非情の存在がその働きかけを心理的に感じ得ない以上、目に見えない動作・作用の結果を、非情の存在を中心にして描くということ自体が不自然になるのである。そして、対象の変化した状態に注目するということは、働きかけの展開 —— 動作性そのものが話者の認識場から基本的に欠如していることを意味し、したがってこのような構文では、動作主も原則として表面には現われないということになる。

先の 489 例の分詞型「受動」構文のうち、非情名詞を「主語」とする文で動作主表示を伴うものが 61 例存在するが、それらは、以下の (32), (33) の例にみられるように、状態成立にとって不可欠な構成物を表現する場合や、情報構造上、動作主を特に強調するような特定の条件を伴う場合に使用されている。

- (32) Но караван, который он возглавлял, был застигнут морозами в устье Юдомы. [75]

シュパンベルグ支隊の船は、このユドマの十字架の数百キロ手前で氷に閉ざされてしまった。 [101]

- (33) Берег Ангары был усеян толпами иркутян. [101]

アンガラ川の岸は人で埋まっていた。 [147]

ところで、有情名詞を「主語」とする分詞型「受動」構文についても、やはり大半のものが動作主表示を欠いており、そこでは同じく対象の変化した状態ということが描かれていると言える。さらには、それが比較的少数しかみられないのは、有情の存在を中心として、その変化した状態を表現する場合には、その変化を内的にコントロールする力をもったものとして、有情の存在を動作主とする自動詞表現のほうが自然であるからであり、その状態が外因的なものである、ということを経験的に表現する意図がある場合にのみ、「受動」構文が使用されるのである。林田 (1999) の分析例においても、有情名詞を「主語」とする文の多くが、次の例のように対象の強制的な位置移動や、外在的な圧力による変化状態を表わす文である。

- (34) Десять японцев, обнаруженных камчатскими сборщиками ясака Матвеем Новограбленным и Федором Слободчиковым, были доставлены в Большерецкий острог. [17-18]

カムチャツカ毛皮税徴収人マトウェイ・ノボグラブレンヌイとフョードル・スロボドチコフの二人に救われた十名の日本人は、カムチャツカのポリシェリツクの柵に連行された。 [18-19]

- (35) Были казнены также трое русских ясачных начальников из трех камчатских острогов. [59]

カムチャツカにあるロシア三防塞の三名の統督も処刑された。 [78]

さて (v) についてであるが、先の 489 例の分詞型「受動」構文の中にも、次の (36), (37) のように、「主語」が文頭位置を占めていないものが 93 例存在する。

- (36) Перед каждым из гостей были положены маленькие пожи, ложки и еще какие-то предметы, похожие на грабли. [54]

そして卓の上には熊手のようなものが置かれ、それに小刀と大さじが添えられてあった。 [71]

- (37) В честь его приезда была выстроена триумфальная арка. [105]

町には新総督を迎えるために新たに門がつくられ、… [154]

以上、現代ロシア語の分詞型「受動」構文の意味と機能における諸特徴を、林田 (1999) にお

ける考察を基に検討してきたが、全体としてそこには、本来的なパーフェクトの意味を明示する専用形式として、他動詞に相関する -н- / -т- 形分詞を述語とする構文を発達させてきた、過去の標準ロシア語の歴史の直接的な継承過程を見出すことができると言えよう。それらの構文は、単なる、対応の「能動」構文の主体－客体関係の、統語構造上における配置変換や、客体の主題化の産物ではなく、「能動」構文とは明確に異なる「動作・作用の結果としての状態」の意味の表現形式として、独自の意味と機能をもっているのである。

そして、この構文が現在時制以外においてアオリスト的な意味を表現する場合に、先にみたような「状態の出現」の意味と「動作・作用の完了」の意味が接近、融合する可能性が開かれ、そのような可能性が顕在化した場合にのみ、客体の主題化機能や動作主の非焦点化という機能が前面に出てくると言えるであろう。

ところで、現代ロシア語の分詞型「受動」構文の上記のような考察を証左する上で、林田 (1999) では触れなかった、もう一つの重要なこの構文における特徴をみていく必要があるであろう。

先に、現代ロシア語の -н- / -т- 形分詞は、原則として完了体の他動詞に相関するということをみた。しかし、これは形態的にのみ言えることであって、実際の用例をみれば、-н- / -т- 形述語のうちかなりのものが、以下の例のように、文脈によっては他動詞に相関するものではなく、再帰動詞を中心とした非他動詞に相関するものであると言えるのである。このような分詞の多くは、意味的に非他動詞に相関する場合には、主語自身の質的变化、感情の変化、自己自身への動作・作用などの、それぞれの変化・作用の結果としての主語自身の状態を表わしており、そこに何らかの外在的な作用、動作主の存在は見出し得ないのである。

заржавлен	—	заржавел	ослаблен	—	ослабел	воспален	—	воспалился
					ослабили			воспалили
влюблен	—	влюбился	растерян	—	растерялся	смущен	—	смутился
					растеряли			смutilи
испуган	—	испугался	углублен	—	углубился	настроен	—	настроился
		испугали			углубили			настроили
погружен	—	погрузился	расстроен	—	расстроился			
		погрузили			расстроили			
поражен	—	поразились	огорчен	—	огорчился	убежден	—	убедился
		поразили			огорчили			убедили
взволнован	—	взволновался	одед	—	оделся	закутан	—	закутался
		взволновали			одеди			закутали
причесан	—	причесался						
		причесали						

林田 (1999) から、このような -н- / -т- 形述語が意味的に非他動詞に相関していると言える例をいくつかみてみよう。

- (38) Кодаю же *был настроен* вполне оптимистически. Он *был убежден*, что ничего плохого с ними не случится, ... [34]

光太夫は …, よもや自分たちがここで殺されることはあるまいといった楽観的な気持になっていた. [42]

- (39) Он *был погружен* в свою работу, ... [40]

光太夫は … 自分だけの仕事に没入していた. [51]

- (40) Люди здесь *были хорошо одеты*, ... [91]

町を歩いている人の服装も立派に見えし, … [128]

現代ロシア語の規範文法では、上のような特徴をもつ -н- / -т- 形述語の多くは、形容詞として扱われているが、今日においても、数多くこのような述語がみられること自体、-н- / -т- 形述語が全体として、ヴォイス・カテゴリーとは無縁の、「動作・作用の結果としての状態」という、状態指標の形式としての性格を色濃く残していることの証しであろう。

4-2. 再帰型「受動」構文

現代ロシア語の再帰型「受動」構文も、やはり 3. でみた、それ以前の諸特徴をそのまま継承していると言ってよい。

今日においても、ロシア語の他動詞のうち、まず一割強のものが「受動」の意味の再帰動詞形をもたず、また再帰動詞が「受動」の意味をもっている場合でも、その約半数において接辞 -ся の付加が必ずしも「受動」性表現の一律的な形態表示とはなっておらず、それらの再帰動詞が「受動」性表現手段として使用されているか否かは、実際の文中での使用状況 —— すなわち統語環境及び文脈によって決定される [14:149].

一・二人称代名詞が「主語」となることがきわめて稀であるという点も、3. でみた同じ事情が現代ロシア語にもあてはまる。林田 (1999) で分析対象とした 2173 例の再帰動詞の使用例中、「受動」の意味をもつのは 100 例のみであり、その 100 例中には、一・二人称代名詞を「主語」とする例は存在しない。

また、動作・作用そのものの過程を、眼前描写的に描く継続相ではなく、動作・作用の結果としての対象の変化の反復性と、そのことを通じての、対象の一般的状态 —— 恒常的属性が多くの場合表現されるという特徴も、過去からそのまま継承している。先の 100 例の分析結果においても、77 例が習慣的反復を表わす文であり、残り 23 例についても、以下の例のように、長期間の反復的事実の積み重ねとしての継続状態や、過去の動作・作用の結果状態の意味に傾く「記録の現在」、そして、基準時点以降の新たな状態を示唆した用法など、いずれも典型的な継続表現とはなっていない。⁽³⁾

- (41) Европейские товары *доставлялись* в Иркутск через Верхний Устюг, Казань, Тобольск, Томск, Енисейск и Братские пороги. [109] — 習慣的事実

ヨーロッパの商品は遠くウエリキー・ウスチュグ、カザン、トボリスク、トムスク、エニセイスクを経て、ブラーツクの早瀬を遡って運ばれて来て、露店露店に並べられた。 [160]

- (42) Впоследствии, по мере расширения деятельности Российско-американской компании, тракт постепенно *благоустривался*. [74] — 長期継続

その後、[この荷駄街道は] 露米会社の活動とともに次第に整備されて、…

[101]

- (43) В первой из них в примечаниях *приводятся* подробности из жизни Созы и Гонзы. [16] — 記録の現在

殊に前者には兩名のロシアにおける生活の様子がかなり詳しく脚注の形で書き込まれている。 [16]

- (44) Подошла официантка и объявила, что ресторан *закрывается*.

— 基準時点以降の新たな状態の示唆

ウェイトレスがやってきて、レストランはもうじき閉まりますと告げた。

このように、再帰型「受動」構文が、習慣的事実や「主語」の一般的な状態・属性を表現することが多いのであれば、当然、動作主も不特定となる可能性が高くなる。したがって、このタイプの「受動」構文においても、動作主が表示されることは非常に少なく、林田 (1999) の分析例でも、100 例の再帰型「受動」構文中、動作主表示をもつ三項「受動」構文は 3 例にすぎない。

以上のように、現代ロシア語の再帰型「受動」構文の諸特徴は、これらの構文が、不完了体動詞の全体系に相関する受動カテゴリーを表現する文法的手段としては、きわめて不安定なもので、文法的受動表現としては未だ完成していない、ということを示している。

それは、すでに 3. でみたように、再帰動詞における「受動」の意味が、「主体内に留まる動作・作用や変化の過程」を表現するという、中動的意義の拡張によってもたらされたものである、ということを経験的に継承したことの結果である。

「受動」の意味は、依然として中動的個別的な意味の一つとして、現代ロシア語の再帰型「受動」構文においても、「主語」の位置にある事物が完全な脱動作主性を有するという、文の具体的な使用の中でのみ獲得されるのであり、そこでは、動作・作用の過程そのものを、継続相として表現する不完了体動詞「能動」構文とは基本的に異なる、「習慣的事実と、それを通じての事物の一般的状態、恒常的属性」という事態が描かれることになるのである。

したがって、この再帰型「受動」構文の本質的な価値も、動作・作用の方向性転換といった、「能動」構文とのヴォイス対立においてとらえ得るものではなく、中動的意義の拡張の中に見出さねばならないと言えるであろう。

5. 他言語における「受動」構文—フランス語と日本語の場合

これまで、ロシア語の「受動」構文と呼ばれてきた形式が、本質的には、「同一の言語外事実の表現における、主体—客体関係の統語構造上の配置転換」という、動作・作用の方向性転換の言語化という機能をもつものではなく、「連辞+ -н- / -т-, -м- 分詞」及び、「動詞形態における再帰指標接辞 -ся の付加」という、形態、統語構造が歴史的にもつ本来的な意味機能を継承したものとして、「動作・作用の結果としての状態」及び、「主体に内在的な動作・作用や変化の過程」という意味機能をもつ表現形式としてとらえられる、ということのみてきた。したがって「受動」構文の本質的な機能は、動作・作用の方向性転換、主題機能をもつものとしての客体の項としての昇格、ということにあるのではなく、「能動」構文によって描かれる事態とは異なる事態を表現する、という点に求められるべきであるとした。

ところで、このような「受動」構文の本質的な機能が、「能動」に対立するものとしてのヴォイス転換ということの中——派生的機能として、それらの価値が実現されることはあっても——にではなく、「主体を越えての動作・作用の展開」とは異なる事態の言語化にあるという事実は、決してロシア語のみにみられる現象ではない。

5-1. フランス語における「受動」構文

フランス語においても、「受動」構文とされるものには、代名動詞の「受動」的用法という再帰型構文と、「être + 過去分詞」という分詞型構文の二形式が存在する。

ところで、フランス語においては、そもそもヴォイスとしての「受動」に対応する固有の言語形式は存在しない。「être + 過去分詞」形は、現在の状態を静態的に示す être と、動詞の形容詞形である分詞の分析形式であって、それは「完了した動作・作用の結果としての状態」という、事物のある時点における属性を表現することを本質的な機能としている。そこにおいては、「能動」と「受動」の対立という観念は本来的に存在しておらず、それは arriver, entrer, devenir, changer 等の場所の移動、状態の変化を表わす自動詞や、さらに再帰代名詞 se を伴って使われる代名動詞の場合には、この表現形式が「受動」とは関係しない、本来的にはパーフェクトを表わす複合過去としての意味をもつことから明らかである。

したがって、この分詞型「受動」構文は、現在や半過去、未来では、原則として動作・作用の結果としての状態を表わしており、この場合動作主補語は示されないのが普通である。

- (45) Son travail *est terminé*. [18:307]

彼の仕事は終わっている。

- (46) Son article *était écrit*. [18:307]

彼の論文は書き上がっていた。

ところで、このような「être + 過去分詞」形式の本質的な機能としての「動作・作用の結果としての状態」の意味は、特定の条件下において、より本来的な「受動」の意味に近づくとされて

いる。それは動作主補語の存在や、現在、半過去、未来以外の時制での使用、時の状況語の存在、等の条件が伴う場合である。

- (47) Marie *était aimée de ces gens*. [18:293]

マリーはそれらの人々に愛されていた。

- (48) Ces terres *sont possédées par le châtelain*. [4:179]

これらの土地は城主に所有されている。

- (49) La porte *est fermée par le concierge à 8 heures*.

門は管理人によって8時に閉められる。

- (50) La fenêtre *a été ouverte à 6 heures*.

窓は6時に開けられた。

- (51) Hier, dans la cour, Milou *a été frappé* avec un bâton. [4:178]

昨日、中庭でミルーは棒でたたかれた。

(47)～(49)は現在、半過去で、いずれも動作主補語や時の状況語を伴っているものであるが、(47)、(48)では現在の継続的狀態が、(49)では習慣的事実が描かれており、いずれも眼前描写的な動作・作用の展開を表現する文ではない。フランス語においてもロシア語と同様に、現在進行中の出来事を「être + 過去分詞」の形式で表現することは困難だとされている [4:175-176]。

- (52) *Le gâteau *est mangé* par Marie.

そのお菓子はマリーによって食べられている。

フランス語は、ロシア語が動詞における完了・不完了の対立としてのアスペクト関係を発達させてきたのとは異なり、時制形式の発達を通してアスペクト的要素を表現しており、動詞そのものにおいては、アスペクト・カテゴリーは未分化である。したがって、すでにみたように、ロシア語において、「動作・作用の結果としての状態」を表現する形式として、不完了体に相関する「受動」分詞が次第に生産性を失い、専ら完了体とのみ相関するようになったのに対し、フランス語においては、(47)、(48)のように、本来的に継続的狀態を表わすような *aimer*, *posséder* 等の動詞が「être + 過去分詞」形で使われることを妨げないし、また (49) のように限界動詞の場合であっても、反復相としての意味を許容するのである。

しかしながら、(47)、(48)は本来的に状態を表わす文であり、(49)はロシア語の再帰型「受動」構文の意味機能と同じく、動作・作用の結果としての対象の変化の反復性ということを通して、対象の習慣的狀態、恒常的属性が表現されており、いずれにせよ「能動」に対立する、同一の動作・作用の方向性転換という機能としての「受動」ではなく、まさに状態、属性表示の機能をもつ文として理解されるものである。

一方、(50)、(51)のように、時制が複合過去となっている場合には、単純過去と同じくアオリ

ストとして、過去に生じた事態が一括して「点」としてとらえられ、抽象的に報告されている。このような場合にのみ、4-1. でみたロシア語の場合と同様に、「状態の出現」の意味と「動作・作用の完了」の意味が接近、融合する可能性が開かれ、「能動」構文との対立においてとらえられるような、受動の意味が浮上してくることになるのである。

このように、フランス語の分詞型「受動」構文においても、その基本的な機能が「動作・作用の結果としての状態性」表現にあるということは、ロシア語の場合と同じく、動作主補語を伴う場合はごく少数に限られ、またそれが示される場合も、無生物の比率が圧倒的に高いという事実によっても裏づけられている。Корди (1974) の資料によれば、本来動作主補語を伴わない結果状態を表わす文を除いても、動作主補語が示される文は、全体の五分の一にすぎないとされている。そして、動作主補語が無生物である場合には、道具、手段を表わす補語との区別がしばしばあいまいとなり、動作主補語というより、むしろ状態をもたらす原因、起点としてとらえられるべきものであるとの指摘がなされている [18:304]。

一方、フランス語の代名動詞の「受動」的用法は、

- (53) (i) 時間的に特定のある時点に位置づけられる行為を表わすことはできない。
- (ii) 動作主は原則として文中に現われず、想定される潜在的動作主は、不特定の人間と解釈される。
- (iii) 「主語」は原則として三人称の事物に限られる。
- (iv) 習慣性や可能性、規範性といったモダリティーの意味が表現されることが多い。

といった特徴をもつ。

これらの諸特徴は、すでに明らかなように、4-2. で検討したロシア語の再帰型「受動」構文の特徴と大きく重なるものである。それは、ロシア語においてもフランス語においても、「求心的な動作・作用、変化の内在的発現」としての再帰型構文がまずあって、言語外事実の諸要素の総和としての特定条件の下で——とりわけその変化の過程に何らかの外在的な要素が関わっているという観念が生ずるとき——、その本質的な機能の個別的な価値としてのみ、「受動」的表現が実現されているということの証しである。

しかしながら、そこにおける「受動」とは、「能動」に対立するものとしてではなく、したがって、動作・作用の方向性、具体的なエネルギーの流れのプロセスを描くものとしてではなく、その外在的力の作用の結果としての事物の変化の反復性、ということを通じて、その事物の習慣的、一般的状態、さらには恒常的属性の表現ということが意味されているのである。そこでは外在的要素というものが観念されることはあっても、現実の場としての視点からはむしろ排除されており、描かれることの中心は、あくまでも事物の内在的属性なのである。

5-2. 日本語における「受動」構文

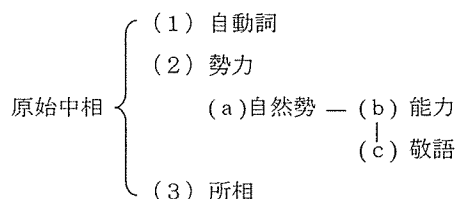
ロシア語やフランス語における、このような「求心的な動作、変化の内在的発現」という本来

的機能をもつ表現形式が、その延長上に、「可能」や「受動」といった個別的価値を発展させるという例は、なにも印欧諸語にのみみられる現象ではない。

日本語においても、細江 (1928) によって他動詞の可能形と同じ形態をとる自動詞、及び受身、可能の助動詞「れる」、「られる」の歴史的な形成過程について、次のような興味深い指摘がなされている。

「(Ⅰ) 我が國語の動詞は、太古の或時代に於ては丁度梵語の *Parasmai-Pada*, *Atman-Pada* ; 希臘語の *Active Voice*, *Middle Voice* に比すべき二語形の併立を有して居た。予はこれを「能相」「中相」と名付けるが兩形が劃然と分離した當初に於ては「中相」は「能相」に「ゆ」なる語尾を附けたものであつたが、やがて動詞の種類増加し活用の複雑となるにつれて「ゆ」・「らゆ」を添へた姿となり、奈良朝期に入る前より「ゆ」・「らゆ」は「る」・「らる」に轉じはじめ、平安朝期以後に至りて大方は「る」・「らる」となつて仕舞つた。…

(Ⅱ)「中相」の原意は上述の如く印歐語に於ける該當語形の原意と略同様のもので其轉成の模様も彼に於けると酷似の間にあり、多數のものは「自動詞」及び「所相」の方向に變遷發達をしたが、尚我が國に於ては移動性に屬するものより自己以外の勢を表はす場合が出來、次で能力を表はすものを生じ、再轉して一種の敬語を成せる様にみえる。今これを表解すると略



の如くなる。」[13:111-112]

また橋本においても次のような記述がみられる。

「四つの意味(受身, 自然, 可能, 敬語 —— 筆者註)のものの中、最古くから見えるのは、受身と、自ら起り自らなる意味のものである。これが、古くは「ゆ」「らゆ」であらはされる方が多かったのであるが、實例から見ると、受身よりも自らなる意味の方が多い。… 受身の意味のものは、どうであるかといふに、これは自らなる意味のものから轉化したものであらうとおもはれる。」[9:277-279]

すなわち、上代日本語においては、一つの動詞が「能相」、すなわち遠心相では「四段」に活用し、「中相」、すなわち求心相を表現する場合に、自らなる意を表わす語尾「ゆ」を付け、「下二段」に活用しており、助動詞「ゆ」、「らゆ」—— のちの受身、可能、自發、尊敬を表わす「る」、「らる」—— はこの「ゆ」語尾と同源であると考えられるのである。

このように、「求心的な動作・作用、変化の内在的發現」ということの延長線上に、「受動」とい

う表現が二次的に発生していくという同一の経緯が、歴史的、地理的に無関係な系統の異なる言語間でみられるということは、とりもなおさず、人間言語としてのシステム、人間共通の認識方法の普遍的側面を反映した例証となろう。

5-3. 「受動」構文の各言語間における異同点

ところで、ロシア語、フランス語の再帰型「受動」構文や、日本語の受身の助動詞「れる」、「られる」は、以上のようにその歴史的形成過程において、同一の思考の発展プロセスが観察されるのであるが、今日、その具体的な機能——形式的、意味的制限において、各言語間でかなりの相違がみられることも事実である。

それらの相違点は、

- (54) (i) 動作主表示の可能性
- (ii) 有情「主語」の可能性
- (iii) 意味的制限

の三つの観点からまとめることができる。これらの項目は、各言語においてそれぞれ相互に関連性をもち、全体として当該言語の「受動」構文の意味的、機能的な発展段階を特徴づけ、また各言語の体系内において、他の表現形式との関係において、いかなる機能分担を担っているかということを明らかにするのである。

まず(i)動作主表示の可能性であるが、すでにみたように、フランス語の代名動詞の「受動」的用法では、動作主は原則として文中に現れないが、ロシア語の再帰型「受動」構文及び日本語の受身文においては、このような制限はない。ただしロシア語においては、すでに4-2.でみたように、このタイプの構文で動作主が表示される割合は、実際には非常に低く、また動作主表示がある場合でも、不特定の動作主や自然力が表現される場合が多く、逆にフランス語においては、例外的とはいえ、以下のように動作主補語が表現される文が現実存在することが指摘されている [35:104].

- (55) *Ça ne se fait que par des sportifs.* ⁽⁴⁾

それはスポーツマンにしかされない(できない)。

- (56) *Cette réparation doit se faire par un technicien autorisé.*

この修理は有資格の技術者によってなされねばならない。

このようにみえてくると、動作主表示の可能性という点に関して、ロシア語とフランス語で大きな差異はないとも言えるが、しかし、原則として許容しないという場合と、許容されるが例は少ないというのでは、そこに何らかの本質的原因を求める必要があるだろう。

動作主表示の可能性におけるロシア語とフランス語の相違ということには、実はすでにみた、両言語の分詞型「受動」構文における差異が起因していると考えられるのである。すなわち、ロシア語の分詞型「受動」構文では、原則として反復相を表現することはできないのに対し、フラ

ンス語では条件によっては可能となる。したがって、動作主表示が必要な場合には、フランス語では分詞型「受動」構文を使用すればよいということになるのである。

ところで、動作主表示の可能性における両言語の差異は、(iii)の意味的制限における差異にも相関してくる。両言語において共通な、「事物の習慣的、一般的状態、さらには内在的属性を表現する」という基本的な意味は、厳密には、各言語においてその意味内容の制限に差が存在する。フランス語では、この構文で圧倒的多数を占めるのが、可能、規範のモダリティーを伴う文で、本来的に超時的な、事物の恒常的属性が表現される。そこでは現実の出来事ではなく、その潜在的な可能性のみが描かれている。

- (57) Ce roman *se lit* facilement. [8:214]

この小説は読みやすい。

- (58) Cette racine *se mange*. [8:215]

この根は食べられる。

- (59) Le vin rouge *se boit* chambré. [8:215]

赤ワインは室温で飲むものだ。

ロシア語の再帰構文にも、以下の例のように潜在的可能性や規範を表わす用法は存在するが、それは、必ずモダリティーを伴い、本来的に事物の内在的特性を表現しており、且つこのような意味で用いられる再帰動詞は、語彙的に制限されているという理由で、擬似「受動」用法とされ、本来の「受動」の意味とは区別されている。

- (60) Проволока *гнется*.

針金は曲がる。

- (61) Эта чашка *не бьется*.

この茶碗は割れない。

- (62) Дверь легко *открывается*.

ドアは簡単に開く。

しかしながら、フランス語の代名動詞の「受動」的用法は、上記のようなモダリティーの意味を伴わない、現実の出来事を意味する文も許容するとされる。

- (63) Le noir *se portait* beaucoup cet hiver. [34:293]

この冬は黒が多く着られていた。

- (64) Cette pièce *se joue* partout. [34:293]

この芝居はいたるところで上演されている。

これらの用法は、ロシア語の「受動」的用法と合致するものであり、具体的な出来事の反復を

通して事物の特徴 —— そこでは恒常的な属性の場合もあれば、ある限定された期間における一時的特徴も表現可能となる —— を表わす文となる。ただし、このような場合においても、フランス語においてはやはり動作主は不特定である。それに対して、ロシア語の再帰型「受動」構文の場合には、眼前描写的な、具体的な出来事の展開を表現する文こそ避けられるが、ある特定期間内の特定の動作主 —— 集団、個人を問わず —— が想定されるような場合の、反復的な出来事の描写は許容されている [12:113]。したがって、特定動作主の可能性は、その表現形式上にも具体的な形をとって現われる可能性を開くのである。

以上のことから、ロシア語とフランス語でこのタイプの構文は、同じく「反復の出来事を通しての事物の特徴」ということを表現してはいても、その時間的、空間的な限定指示において、ロシア語の方がより限定力が強いと結論づけられる。そして、再帰型構文にあつては、第一のモダリティーを伴う擬似的「受動」用法の方が、第二の「受動」的用法に比べ、その意味拡張プロセスにおいて早い段階に位置づけられるものであれば [5:267]、フランス語の代名動詞構文は、その意味拡張のプロセスにおいて、擬似「受動」用法から「受動」的用法への過渡的な段階に留まっているということができ、そこには、とりもなおさず、分詞型「受動」構文との競合という事実が関係しているのである。事実、(63)、(64)の文は、ほぼ同義の分詞型「受動」構文によって言い換えが可能であるとされる [34:293]。

- (65) Le noir *se portait* beaucoup cet hiver.
= Le noir *était* très *porté* cet hiver.

- (66) Cette pièce *se joue* partout.
= Cette pièce *est jouée* partout.

ところで、フランス語において、潜在的に特定の動作主が想定される文、反復相ではない一回の出来事を表わす文も、この「受動」的用法の例として挙げられることがある。

- (67) La question *se traite* actuellement à l'Assemblée. [35:104]
この問題は現在議会で扱われている。

- (68) Le bataille *s'est livré* hier soir. [4:189]
昨夜戦闘が開かれた (始まった)。

- (69) Le décision *s'est prise* hier soir. [10:72]
昨夜決定が下った。

このようなタイプの文は、抽象的な出来事を表わす場合に限られ、具体的な事物が「主語」となる場合には、反復相のみが可能であるとされる [35:105][4:189]。

しかしながら、このタイプの文が、抽象的な出来事を表現する場合に限られるということが、それらが一般に中立的用法と呼ばれる自動詞的な用法に分類されるべきものであることを暗示している。

言語外事実としても、実際に外的な動作主が存在しない、それ自身として運動し、変化する能力をもつもの — まずもって有情のものが、そしてそれ自身変化する特性をもつ非情物があげられるが — の、自律的、内発的な運動、変化は、最も典型的な求心相の意味として、ロシア語においてもその表現形式は、再帰型構文の中心的な位置を占める一般再帰用法として、古代ロシア標準語の段階ですでに確立していたものである。そしてこの典型的な一般再帰用法は、ほぼ同時に、そのアナロジーとして、それ自身としては運動、変化する能力をもたない、抽象的な概念をもつ出来事や、さらに非情物の変化についても表現するようになる。そこでは、実際には存在するはずの外的な力、動作主は観念されず、運動、変化がそれ自体として、自律的に生起する事態としてとらえられるのである。

(70) Он *поднимается* по лестнице.

彼は階段を上っている。

(71) а) Солдаты *выстроились*.

兵隊たちは整列した。

б) Солдаты сами *выстроились*.

兵隊たちは自ら整列した。

в) Командир *выстроил* солдат.

司令官は兵隊たちを整列させた。

(72) а) Холодильник *выключился*.

冷蔵庫が切れた。

б) Холодильник сам *выключился*.

冷蔵庫がかってに切れた。

в) Кто-то *выключил* холодильник.

誰かが冷蔵庫を切った。

(73) Флаг медленно *поднимается* по флагштоку.

旗がゆっくりとポールを上っていく。

(70) は最も典型的な一般再帰用法として、「彼」の自律的、内発的運動を表わしており、言語外事実としても外的な力、動作主は完全に存在しない。一方、(71a), (72a) でも、そこでの運動、変化は、自律的、内発的なものとしてとらえられているが、実際にはそれぞれ(71b), (71c), (72b), (72c), の二通りの状況が可能であり、外的な力、動作主が存在するかもしれないかについては不明である。そしてこれらのアナロジーとして、実際には外的な動作主なしではあり得ないような運動、変化についても、(73) の場合のような表現が成立することとなる。しかしながら、(70), (71a), (72a), (73) の運動、変化はいずれも「外的な力、動作主を捨象したところの自律的、内発的な運動、変化」という同一の観念として、話者によって描かれているのである。そして抽

象的な概念としての出来事は、何らかの特定の意志から独立した出来事の生起、推移の表現として、一般再帰用法の中でも、(73)のタイプの表現として最も現われやすいものである。

ロシア語において、一般再帰用法と「受動」的用法を区分する絶対的な基準は存在せず、「受動」的用法は、語彙的、形態・統語的手段の一定の条件——何よりもまず動作主表示の存在——の下でのみ出現する、一般再帰の個別的「価値」として理解されるものである、ということを考えるならば、動作主表示が原則として許容されないフランス語の代名動詞構文にあって、(67)～(69)のような文は、外的な動作主が暗示され、「受動」へシフトする可能性を内包しながらも、未だ「受動」としての地位を獲得してはいない、中立的用法の範囲内に留まるものとして理解するのが妥当であろう。

次に、有情「主語」の可能性であるが、フランス語で原則としては三人称の事物に限られるという制限、ロシア語で、三人称の有情「主語」こそ許容するが、一・二人称の代名詞「主語」は制限されているという事情は、すでに 3.、4-2. でみたように、語彙的、統語的環境によってのみ意味が規定される再帰型構文にあっては、「主語」が動作主としての理解が可能な限りは、それが「擬似受動」であれ「受動」であれ、そういった意味を排除する傾向をもたらすという同じ原則に基づいたものである。

事実、ロシア語においても三人称の有情「主語」についての制限はないものの、実際にはその頻度は低く、林田 (1999) で分析対象とした 100 例の再帰型「受動」構文でも、わずか 7 例のみが有情「主語」のものであった。

一方、日本語は、ロシア語、フランス語とは根本的に異なる様相を呈しており、有情の存在を「主語」とする「受動」構文の割合が、ロシア語、フランス語に比べても高い。林田 (1999) の分析においても、679 例の日本語「受動」項文中、有情名詞を「主語」とするものは 290 例あり、総数の 42.7% に上る。

日本語の「受動」構文の「主語」として、有情名詞が多く現われるのは、有情名詞を「主語」とする動作「受動」の存在に、その理由があると考えられる。以下の例にみられるような、有情名詞を「主語」とする動作「受動」構文は、すでに多くの研究者が指摘しているように、話者が自身もしくは有情「主語」で表わされている人物の立場に立って、ある出来事、事柄からその人物が影響を被ったという経験を述べる文である [20][21][26]。

- (74) また日本の漂流民たちは、ブリヤートの女が布地を買う時、物指を叩きながら客を呼んでいる商人に長さをごまかされているのも見たし、… [161]

Японцы видели, как торговцы обмеривали бурятских женщин, покупавших мануфактуру, ... [110]

- (75) そして不吉なことを言うものでないと、烈しい言葉で光太夫に叱責された。

[55]

Кодаю отругал Кюэмона, боясь, как бы его слова не накликали новую беду. [43]

- (76) 併し、幾ら嘯鳴られようと、そんなことにはお構いなしに、藤蔵は、昼と言わず、夜と言わず、「与惣松も、勘太郎も、――」と同じことを同じ調子で言った。 [85-86]

Но Тодзо не обращал внимания ни окрики друзей и продолжал монотонно повторять одно и то же. [64]

- (77) 病院へ行く途中、光太夫は涙が頬を伝わるのを通行人に 見られないように注意して歩いた。 [204]

Кодаю отправился в больницу, стараясь незаметно для прохожих вытирать катившиеся по щекам слезы. [132]

ロシア語、フランス語の場合には、すでにみたように、再帰型、分詞型いずれの場合も、「受動」構文は基本的に結果動詞から作られ、そこではある動作・作用の働きかけの結果起った対象の変化した状態、もしくは対象の変化の反復性を通じての一般的状態、恒常的属性が描かれている。そこでは働きかけの展開―動作性そのものが話者の認識場から基本的に欠如しており、したがって、動作主も原則として表面には現われず、情報構造上、動作主を特に強調するような特定の条件下でのみ、むしろ動作主としてではなく、場面、出来事の生起の原因、理由として具現化する。

それに対して、日本語の有情名詞を「主語」とする「受動」構文では、働きかけの過程が対象に目に見えるような物理的変化を与えない、動作動詞で表わされるようなものであっても、その働きかけの作用によって、対象が何らかの心理的影響を受けていれば、それを「主語」の側からの経験として、有情名詞で指示される人物を叙述の中心に場面、出来事を描くことが可能となる。

そしてさらに、それらの表現のアナロジーとして、たとえ動作・作用の直接的な対象でない場合であっても、起った出来事から心理的、物理的な間接的影響を受けた場合には、「太郎は財布を盗まれた」、「私は妻に死なれた」等のように、その影響の受け手を「主語」とする、いわゆる「間接受動構文」が可能となるのである。

ロシア語、フランス語の「受動」構文は、基本的には「状態」、「属性」を表示する文であり、動作受動そのものがそこには成立する機縁をもたないし、当然のことながら間接受動構文のような表現形式を発達させてはいない。

6. ロシア語「受動」構文における「主語」と「主題」 ― まとめに就いて

1. ～ 4. において、ロシア語の「受動」構文の歴史的な形成、変遷過程、及びそれらを継承した現代ロシア語の「受動」構文の意味と機能における諸特徴を検討してきた。それらの考察によって明らかになったことは、以下の四点にまとめることができるであろう。

- (78) (i) 分詞型「受動」構文の形式を担う -и- / -т- 形分詞は、他動性を基軸とするところのヴォイス・カテゴリーとは無関係に、「動作・作用の結果達成された状態」という、本来的な意味でのパーフェクト機能を表現する形式として存在してきた。

- (ii) 現代ロシア語の分詞型「受動」構文も、それまでの -н- / -т- 形分詞の歴史的な意義を直接継承した、「過去の動作・作用の結果としての現在の状態」ということを基本的な意味としている。ただし、現在時制以外の時制で、この構文がアオリスト的な意味をもつ場合に、「状態の出現」の意味と「動作・作用の完了」の意味が接近、融合する可能性が開かれ、そのような可能性が顕在化した場合にのみ、客体の主題化機能や動作主の非焦点化という機能が前面に出てくる。
- (iii) 再帰型「受動」構文は、「主体内に留まる動作・作用や変化の過程」を表現する、中動的意義をもつ -ся 形動詞の意味的拡張によってもたらされたものであり、特定の語彙的、統語的環境の下でのみ、中動的意義の個別的「価値」として実現される。
- (iv) 現代ロシア語の再帰型「受動」構文は、中動的意義の拡張によってもたらされたということの歴史的継承として、不完了体動詞の全体系に相關する受動カテゴリーを表現する文法的手段としてはきわめて不安定なものであり、そこでは動作・作用の過程そのものではなく、主として習慣的事実と、それを通じての事物や状況の一般的状態、恒常的属性という内容が表現される。

これらの結果を踏まえて、最後にロシア語の「受動」構文における「主語」、「主題」という問題をみていきたい。

さて、分詞型「受動」構文が、「主語」で表わされている人や事物の「過去の動作・作用の結果としての現在の状態」を表わしているのだとすれば、この構文の基本的な枠組みは、「状態の担い手 - その一時的状態」として理解できる。

すでに 2-2. でみたように、この構文の形式を担う -н- / -т- 形分詞が、始原的には動詞派生形容詞であった、という仮定を前提にすれば、この構文は、「特徴の担い手」としての「主語」と、「その性質、特徴」を意味する述語から構成される、形容詞述語文と同列のものとして扱うべきものであることを示唆する。

ところで、形容詞述語文は、ある個体を対象として取り上げ、それに関して経験的判断を下すという、典型的な性格づけ文として、「主題 - 論述」構造という二項性をもつ文であるということができる [11:76-77]。したがって、もし分詞型「受動」構文が、形容詞述語文と同様の概念化過程によって形成された文であるとすれば、分詞型「受動」構文も、基本的には「主題 - 論述」構造という二項性をもつ、有題文であるということになり、そこでの文法的主語は、判断の中心、発話の出発点としての「主題」機能をもつものとして理解される。

ただ、形容詞述語が、基本的にはある事物の内的、恒常的性質、特徴を表現するのに対し、-н- / -т- 形分詞の方は、動詞派生形容詞であって、そこでは動作・作用の結果、事物に外的に加えられた特徴としての、その事物の一時的状態の意義が表わされている。このような差異によって、

分詞型「受動」構文は、形容詞述語文とは異なる概念化過程によって形成される文として機能する可能性を内包する。

すなわち、時空間概念とは無縁の内的、恒常的性質、特徴ということの把握には、必ず経験的判断が伴うのに対して、事物の、ある特定の時空間に存在する一時的状態は、普通は、静的状態として経験的判断による把握がなされ、有題文となるが、特に一時的状態ということが事物の存在自体の表現となる場合や、また過去時制などで、事象の生起としての「状態の出現」が描かれる場合には、話者の判断を介在させることなく、その事象全体を一つの項として客観的に描写する事象伝達文として、無題文にもなり得るのである。

したがって、分詞型「受動」構文は基本的には「事物の状態」を表現する性格づけ文として、そこでの文法的主語は「主題」として機能するが、描かれる内容によっては、事象伝達文として、事象の生起に関わる中心的要素が、文の中心軸としての「主語」の地位を担うことになるのである [11:78-80]。

分詞型「受動」構文の「主語」は、動作・作用の客体を表現するものでもなく、客体を主題化したものでもなく、基本的には「事物の一時的状態」という、「能動」文とは異なる意味内容を表現する文であり、そこでの「主語」は、「一時的状態」というものをどのように概念化するかによって、以下の例のように、判断の中心、発話の出発点としての「主題」機能をもつ場合と、客観的な事象伝達における事象の中心軸、統語的中心要素を担う項として機能する場合とに区分されるのである。

- (79) *Суп был подан в оловянном судке.* [54]

汁は錫の鉢に入れられてあった。 [71]

- (80) *Иркутский острог расположен на правом равнинном берегу Ангары, возведен замечательно, ...* [92]

イルクーツクの柵はアンガラ川右岸の平地にあり、たいへん見事に構築されてあって、… [130]

- (81) *После этого инцидента многие чиновники были сменены, ...* [26]

事件後多くの官吏が更迭され、… [31]

- (82) *На огромном столе в центре одной из комнат были разложены бесчисленные образцы растений.* [111-112]

部屋の中央の大きな卓の上には、植物の標本がぎっしり積み重ねられてあった。

[164]

- (83) *Через каналы были перекинuty каменные мостики.* [145]

掘割にはところどころに石の橋が架けられてあった。 [228]

- (84) *Ему уже направлен императорский указ.* [172]

すでに総督ピーリには勅令が降されている [274]

- (85) Японскому купцу Кодаю была пожалована золотая медаль, шестьсот рублей, а также предоставлены жилище и стол. [175]

日本の商人光太夫は金メダルと六百ルーブリ、住居、文机を与えられ、… [279]

(79), (80) の例は、「主語」である名詞句が「主題」となって、その「状態」が述べられている性格づけ文である。一方、(81) は特定時空間での事象の生起を全体として描いた無標の事象伝達文で、無題文である。(82), (83) も同じく事象伝達文であるが、事物の存在自体を描いた存在文として、「主語」が文末に置かれている。さらに、(84), (85) では、「勅令」、「金メダル…」といった名詞句が、事象の中心軸、統語的中心要素として「主語」となっているが、判断の中心的存在として話者に認識されているのは「受け手」の方であり、「事象の中心軸」としての「主語」と、「主題」としての「受け手」が分離し、「主題」が文頭位置を占める有題文となっているのである。

次に、再帰型「受動」構文の場合であるが、この構文が「主体内に留まる動作・作用や変化の過程」という中動的意義の個別的「価値」として実現されるものであれば、そこにおいては、事象変化を担う主体が、その事象の中心軸、統語的中心要素として、表現形式上「主語」としてマーカされる、と理解されねばならないであろう。

しかしながら、この構文が「主語」の完全な脱動作主性という条件の下でのみ実現され、中動的意義の個別的「価値」として、実際に表現し得るのは、特定事物を前提とする、ある時空間で具体的に展開する変化過程ではなく、多くの場合、不定の事物を前提とする習慣的事実、恒常的事実であってみれば、そこにおいては、特定時空間における事象の具体的な生起を客観的に描く、という事象伝達は成立し得ず、むしろ、習慣的事実、恒常的事実であるという話者の経験的判断により、事物や状況の性格づけがなされ、典型的には、「主題—論述」構造という二項性をもつ文として実現すると理解できよう。

性格づけ文としての再帰型「受動」構文は、多くの場合、変化主体として「主語」にマーカされる事物が特徴づけを受けるという形で、「主語」=「主題」という構造をもつが、一方、以下にみるように、変化主体としての「主語」が「主題」とはなっていない文も観察される。

- (41) Европейские товары доставлялись в Иркутск через Верхний Устуг, Казань, Тобольск, Томск, Енисейск и Братские пороги. [109]

ヨーロッパの商品は遠くウエリキー・ウスチュグ、カザン、トボリスク、トムスク、エニセイスクを経て、ブラーツクの早瀬を遡って運ばれて来て、露店露店に並べられた。 [160]

- (86) Обычно предсказания никогда не проверяются, но для очистки совести они повторили гадание — и снова выпало шестьсот ри. [22]

神籤のとり直しはしないものであるが、心晴らしにもう一度試みると、また六百里と出た。 [26]

- (87) В поселке *продавались* и самые лучшие из камчатских соболей. [56]

またカムチャツカで獲れる最も良質の貂も、この聚落に集まって来て、ここで売
買されていた。 [74]

- (88) В окрестностях города *добывались* также ценные сорта мрамора. [142]

またこの町は、紅、もえぎ、黒などの班文を持った白質の大理石を産した。

[222-223]

(41), (86) の例は、事象変化の担い手としての「ヨーロッパの商品」, 「神籤」が同時に「主題」となって、その特徴づけがなされている文である。それに対して, (87), (88) では, 「主題」としての場所が, そこで生起する事象変化の反復性ということを通して特徴づけられており, 事象変化そのものは, その変化主体をも含めて論述部分として表現され, したがって, そこでの「主語」は「主題」ではなく, 本来の意味での事象変化の中心的要素として機能していると言えよう。

<注>

- (1) 18～19 世紀初頭においても、「受動」的意味をもつ完了体 -ся 形動詞構文は残存しているが、19 世紀 40 年代以降、この用法は急激に失われていき、19 世紀末にはほとんど消滅したとされている [32:211-212].
- (2) (25) ～ (43), (74) ～ (77), (79) ～ (88) の例は、林田 (1999) で分析対象とした、井上靖著『おろしや国酔夢譚』(文春文庫版) とそのロシア語訳 Б.В.Раскин 訳 « Сны о России » (Москва, 1980) の二つのテキストからのものであり、各例の末尾の数字は、原典における該当ページを表わしている.
- (3) それぞれの用法の詳細については、林田 (1999) を参照のこと.
- (4) (55), (56)は、山田 (1997) に引用されている Melis, L. (1990) *La voie pronominale: La systématique des tours pronominaux en français moderne*. Paris, Louvain-la-Neuve: Duculot. の例文である. また、フランス語の「受動」構文の理解については、木内良行氏より貴重な助言を頂いた.

<例文出典>

- 井上 靖 『おろしや国酔夢譚』文春文庫, 1974.
 Раскин, Б.В. *Сны о России*. М., 1980.
 Булгаков, М.А. *Мастер и Маргарита*. М., 1988.
 ブルガーコフ М. 『巨匠とマルガリータ』(水野忠夫訳) 集英社, 1977.
 Трифонов Ю.В. *Дом на набережной*. М., 1997.

<参考文献>

1. Бондарко, А.В. Теория значения и трактовка категории залога // *Проблемы теории грамматического залога*. Л., 1978.
2. Данков, В.Н. *Историческая грамматика русского языка: Выражение залоговых отношений у глагола*. М., 1981.
3. Добрев, И.Д. *Старобългарска граматика: Теория на основите*. София, 1982.
4. 藤村 逸子 「フランス語の受動態とその周辺—日本語との比較対照」『フランス語とはどういう言語か』駿河台出版社, 1993.
5. Генюшене, Э.Ш., Недялков, В.П. Типология рефлексивных конструкций // *Теория функциональной грамматики: Персональность. Залоговость*. СПб., 1991.
6. Halliday, M.A.K. Notes on transitivity and theme in English, Part 2 // *Journal of Linguistics* 3.2, 1967.
7. Halliday, M.A.K. Notes on transitivity and theme in English, Part 3 // *Journal of Linguistics* 4.2, 1968.
8. 春木 仁孝 「代名動詞—受動的用法と中立的用法を中心に」『フランス語とはどういう言語か』駿河台出版社, 1993.
9. 橋本 進吉 『助詞・助動詞の研究』岩波書店, 1969.

10. 林 博司 「フランス語受動構文について」『神戸大学教養紀要』34, 1984.
11. 林田 理恵 「ロシア語における「主語」と「主題」そして「主体」について—(1) 序論」『大阪外国語大学論集』第16号, 1996.
12. 林田 理恵 「ロシア語受動構文の意味と機能」『ロシア・東欧研究』第3号, 1999.
13. 細江 逸記 「我が國語の動詞の相 (Voice) を論じ, 動詞の活用形式の分岐するに至りし原理に及ぶ」『岡倉先生記念論文集』岡倉先生還暦祝賀會, 1928.
14. Храковский, В.С. Пассивные конструкции // *Теория функциональной грамматики: Персональность. Залоговость*. СПб., 1991.
15. Исаченко, А.В. *Грамматический строй русского языка в сопоставлении с словацким*. Братислава, Ч. П., 1960.
16. Иванов, В.В. *Историческая грамматика русского языка*. М., 1983.
17. Климов, Г.А. *Типология языков активного строя*. М., 1977.
18. Корди, Е.Е. Пассивные конструкции во французском языке // *Типология пассивных конструкций: Диатезы и залогов*. Л., 1974.
19. Крысько, В.Б. *Исторический синтаксис русского языка: Объект и переходность*. М., 1997.
20. 久野 暁 「受身文の意味—黒田説の再批判—」『日本語学』5巻2号, 1986.
21. Kuroda, Sige-Yuki. On Japanese passives // *Explorations in Linguistics: Papers in honor of Kazuko Inoue*. Tokyo, 1979.
22. Кузьмина, И.Б., Немченко, Е.В. История причастий // *Историческая грамматика русского языка: Морфология. Глагол*. М., 1982.
23. Ломтев, Т.П. *Очерк по историческому синтаксису русского языка*. М., 1956.
24. Маслов, Ю.С. Результатив, перфект и глагольный вид // *Типология результативных конструкций*. Л., 1983.
25. Маслов, Ю.С. *Очерки по аспектологии*. Л., 1984.
26. 益岡 隆志 「受動表現と主観性」『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版, 1991.
27. Никифоров, С.Д. *Глагол, его категории и формы в русской письменности второй половины XVI века*. М., 1952.
28. Ruwet, N. Les constructions pronominales neutres et moyennes // *Théorie syntaxique et syntaxe du français*. Paris, Seuil, 1972.
29. 佐藤 房吉 『フランス語動詞論』白水社, 1990.
30. Шелякин, М.А. Глагол // *Современный русский язык*. М., 1989.
31. Shibatani, M. Passives and related constructions: A prototype analysis // *Language* 61, 1985.
32. Шведова, Н.Ю. Изменения в системе простого предложения // *Очерки по исторической грамматике русского литературного языка XIX века: Изменения в системе простого и осложненного предложения в русском литературном языке XIX века*. М., 1964.
33. Трубинский, В.И. Результатив, пассив и перфект в некоторых русских говорах // *Типология результативных конструкций*. Л., 1983.
34. Wagner, R.L. et Pinchon, J. *Grammaire du français classique et moderne*. Paris, Hachette, 1962.

35. 山田 博志 「中間構文についてーフランス語を中心にー」『ヴォイスに関する比較言語学的研究』三修社, 1997.
36. Знмек, Р. Понимание пассивной перспективы предложения в чешской лингвистике // *Проблемы теории грамматического залога*. Л., 1978.

(1999.10.12 受理)